

# 宋代の層檀國について

勿巡・俞盧和地・陀婆離慈・眉路骨憚及び賈耽所傳の波斯灣西岸諸港

文學士 藤田 豊 八

宋史外國傳に層檀といふ國を傳へて居る。先づその全文を擧げる。

層檀國在南海傍、城距海二十里、熙寧四年、始入貢、海道便風、行百六十日、經勿巡。

古林・三佛齊國、乃至廣州、其王名亞美羅亞眉蘭、傳國五百年十世矣、人語音如大食、地春冬暖、貴人以越布纏頭、服花錦白氈布、出入乘象馬、有俸祿、其法輕罪仗、重罪死、穀有稻粟麥、食有魚、畜有綿羊。

沙牛・水牛・橐駝馬犀象、藥有木香、血竭、沒藥

この文の本づくところであらうと思へるものが、宋の周輝の清波別志卷中（知不足齋叢書）に載せてある。少し煩いやうだが、依つて以て宋史の誤を正すべきものがあるから、次にその全文を載せることとする。

層檀南海旁國也、圍城距海二千里、海道便風、

百六十許日、晝夜行、經勿巡古林三佛齊國、乃至廣州、國主名亞美羅亞眉蘭、傳國五百年十世矣、春冬、貴人以好越布纏頭、服土產花綿白疊布、出入乘象馬、官有月俸、其法輕罪杖、重者死、有稻麥粟胡羊山羊沙牛水牛駝馬魚犀象薰陸沈水香血竭沒藥鵬砂阿魏蘇合香眞珠玻璃葡萄千年棗蜜沙華三酒、交易用官鑄錢、三分其齊、金銅相半、而加銀一分、禁私鑄、人之語音如大食國云、國朝承平日、外國朝貢、間數年必有之、史策但書某國貢方物而已、如封域風俗、皆略焉、獨於層檀、所書如此

この兩文を對照すると、宋史の文に往々譌誤のあらることが知れる。その最も甚だしいものを擧ぐるに、「城距海二十里」とあるが十は固より千の譌であらう。二十里位なれば濱海とか臨海とかいふべきで、特に里數などは擧げないであらう。又「海道便風」の便は萬曆以後の刊本には使に譌して居るが、元槩には正しく便とあり、清波別志にも固より便とある。又宋史の「白氈布」の氈は疊か氈の誤である。その他産物にも多少出入があるが、概して清波別志が正しく、且つ原文に近いやうである。たゞ別志になくして宋史にあるのは「熙寧四年始入貢」の句であるが、これは本紀にも「秋七月戊子、層檀國來貢」とあるから、特に編者の書加へたものと見ゆる。熙寧四年は西曆一千七百一年である。

この國の擬定を試みたものは、予輩の知る限りでは、Hirth及びRockeの兩氏がその著(Chan Jungna)中に於てせしものを始とする。兩氏は即ち宋史の文に依り、この層檀を以て諸蕃志の層拔(Zangue)なりとし、「檀字怪しむべし」と雖も、層拔若

くはその中のある地方と實際上同一なりと想はる  
「ナニ」といひ、又保順郎將層伽尼に注して「層伽尼  
は Zanj を謂ふならむ」といつて居る (Chau Ju-kua  
127)。想ふに兩氏がかゝる擬定をしたのは、この

國から支那に來たる航路が「海道便風、行百六十  
日、經勿巡古林三佛齊國乃至廣州」とあり、  
兩氏に依れば、勿巡は多分 Maskat 附近のある地

方であり、古林は Onion 三佛齊は Sriboja 即ち  
Palembang であり、氣候産物等にも多少の類似が  
あり、且つ「城距海二十里」とあり層拔と層檀とは  
層だけでも同一であるからであらう。若し他に據  
るべき材料がなかつたら、一應尤ものやうにも聞

ゆるが、しかも層檀の檀を抜くば何字かの譌誤  
であると思はない限りは、それを層拔即ち Zanguebar  
と同一とすることは出来ないのである。况んや二  
十里は二千里の譌なるに於てをやである。そして

層檀の二字は宋史外國傳にかく書いてあるばかり  
でなく、宋史本紀にもかく書いてあり、特にさき  
に引いた清波別志にも同一の字が使つてあり、ま  
た宋會要にも

元豐四年六月二十三日、廣南東路經畧司言、  
大食層檀國保順郎將層伽尼、請備禮物詣  
闕謝恩、上批、多給舟令赴闕

とあるから、到底層檀の檀を譌誤と視るを許さな  
いのである。又た兩氏が層伽尼を以て Zanj を謂  
ふならんなどいへるは、殆ど論外であつて、辭を  
費す必要もない。

## 二

さて層檀から廣州に來る間に海上經過する三佛齊  
(Sriboja)は Sumatra の東北岸上の國名で、古林も  
故臨葛郎と均しく印度西南岸上の Onion であら  
う。勿巡は宋史外國傳大食條に

其國部屬各異名、故有<sub>二</sub>勿巡<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>陀婆離<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>俞盧和地<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>麻囉跋等國<sub>一</sub>、然皆冠以<sub>二</sub>大食<sub>一</sub>、勿巡所<sub>レ</sub>貢、又有<sub>二</sub>龍腦兜羅錦毬錦襖蕃花簾<sub>一</sub>、陀婆(離)有<sub>二</sub>金飾壽帶連環臂鈎數珠之屬<sub>一</sub>

とあり、宋會要に據ると勿巡は眞宗の大中祥符四年(西紀一〇一一)に已に朝貢して居り、また同書神宗の熙寧五年(西紀一〇七二)六月廿一日の詔に大食勿巡國進奉使辛押陀羅歸<sub>レ</sub>蕃、特賜<sub>二</sub>白馬一匹、鞍轡一副<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>乞統察蕃長司公事、令<sub>二</sub>廣州相度<sub>一</sub>、其進<sub>下</sub>助<sub>二</sub>修廣州城<sub>一</sub>、錢銀<sub>上</sub>不<sub>レ</sub>許、といつて居る。これが宋史大食傳に「熙寧中、其使辛押陀羅、乞<sub>二</sub>統察蕃長使公事<sub>一</sub>、詔<sub>二</sub>廣州<sub>一</sub>裁度、又進<sub>二</sub>錢銀<sub>一</sub>、助<sub>二</sub>修廣州城<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>許」とある。それで當時廣州に於ける勿巡國人の勢力の大なること、知るべきである。さればこの國は古林即ちOulion

の西に在る大食國の一で、盛に支那と通商したことが知らるゝのである。そこでHirth氏等は之をMaskatと見たので勿巡をMaskatのMasの音譯であらうとでも想つたのであらう。しかも氏等はその實これがSoharの波斯名であるといふに氣付かなかつたものと見ゆる。Magoudiに據ると

Omanの首都をSoharと呼び、波斯人は之をMezoenと稱するが、このOmanからMaskatに至るの距離は五十Parsangesであつて、Maskatには泉があり船人は淡水を獲んが爲めにこゝに來るのである(Les Prairies Dor, I, 331)とある。このMezoenを音譯したのが即ち勿巡である。Maskatは船人が單に淡水を得んが爲めに寄泊するに過ぎないのであるから、この地の商人が宋會要及び宋史に傳ふるが如く、支那に於て勢力があつたものと思へぬのである。西紀一一五四

年に脱稿した Eritisi の地理書に依ると Sohah 即ち Mezoen について

やむに此地には世界のあらゆる地方より商賈雲集し、Yeman の産物を輸入し、各種の貨品を輸出し……支那への遠航も此地より發したが、今やかゝる状態は過去の事となつた云々 (Trad. par Jaubert, I, 152)

とらひ、Aboulfeda の地理書には Azyzy を引いて Oman は美はしき城市で、コンに海港があつて、Sind, Indes, 支那及び Zendi 諸國からの商船が多ら (Trad. par Guyard, II, 137)

といつて居る。想ふにこれは十一世紀の終までのことであらう。寶慶元年(西紀一二二五)九月まで出來た諸蕃志には、支那と交通した大食諸國の名が随分澤山擧げてあるが勿巡の名は勿論をれらしいものない。Hirth 氏は勿拔は Sohah? として

あるが、拔を巡の譌としない以上そうはいへないのである。

勿巡が Mezoen の音譯で即ち Oman の首都 Sohah の一名だとすると、古林 Oulion を經て廣州に來るにこゝを通過する層檀は固より Oman の西か若くは北でなくてはならない。Zanguebar はこの西に在る。この點では之を層檀とするに差支はないやうであるが、淡水を得る爲めに Maskat に寄泊するとしても、その北に在る勿巡を經過する必要はない。たゞそはこの地が當時海港として盛大を極めて居たからだといへぬこともないが、層檀の都城は海を距る二千里だといふ。Zanguebar 若くはその中のある地方としては實際に合はぬ。况んやさきにもいつたやうに到底その名が、かゝる擬定を容さぬに於ておやである。且つこの國が決して Zanguebar などでないといふ證據は宋の龐元英

の文昌雜錄中にも見えて居る。元英は主客郎中になつて居た人でこの雜錄は元豐五年(壬戌、西紀一〇八二)から同八年(乙丑、西紀一〇八五)までの在官中の見聞を手記したものである。官が官だけに當時朝貢諸蕃の事がこの書中に散見して居るが、主客の掌ごるところの諸蕃を列擧した中に

其十三曰層檀、東至海、西至胡盧沒國、南至霞勿檀國、北至利吉蠻國、其十四曰勿巡、舟船順風、泛海二十晝夜、至層檀、其十五曰俞盧和地在海南

といつて居る。(雅雨堂叢書本卷一、三頁)こゝに層檀に與へてある四至について、予輩は「北至利吉蠻國」の利吉蠻の何音に對せしやを明にするこゝを能はざるが、「南至霞勿檀國」の霞勿檀が Han-adan の對音であり、西至胡盧沒國の胡盧沒が Hurum 即ち Rum (小亞細亞)の對音である、

疑へまいと思ふ。そしてこの國の都城が清波別志に據ると海を距る二千里といへる所謂海は波斯灣であらうと思はれ、また大食諸國當時の情態より推して層檀は Seljuk Turk を謂つたもので、即ち Sultan の音譯であらうと信ずる。こゝは Melik Shah を滅力沙として國名としたのと同様である。尤も文昌雜錄に東至海の海は波斯灣を指したのであるか、はた Khazar 海即ち Caspian 海を指したのであるか、不明であるが、こゝは何方にしても解釋ができません。やうである。

Seljuk Turk は Togrul-Begh に至つて畧ぼ大食諸國を統一して Sultan を稱して居たのであるが、西紀一〇五七年、正式に Khalif から Emir-el-omara 即ち「諸王の王」(Prince des princes)「國の副王」(Lieutenant général de l'Empire)の號を授かつた (Deguigne, Histoire général des Huns, II, 198)



至るにあらは Omān から波斯灣頭に至るをいつた  
 のかも知れぬ。

この國の領域は Togrul-Begh の時に、已に西は  
 Tigris Euphrates から東は Oxus Jaxartes に及んで  
 居たのである。従つて大食の産物は即ちこの國の  
 産物といひ得るのである。宋史及び清波別志は層  
 檀の産物として稻・麥・粟・胡羊・綿羊・沙牛・水牛・駝  
 (橐駝)・馬・魚・犀・象・董陸香(即乳香 Frankincense)・沈  
 水香((Gharu)・木香(Putchuk)・血竭(Dragon's blo-  
 od)・沒藥(Myrrh)・鵬沙(Borax)・阿魏(Asa-foetida)・  
 蘇合香(Sorax)・眞珠・玻璃・葡萄・千年棗(Persian  
 dates)・密沙華三酒を擧げて居るが、これが嶺外代  
 答、諸蕃志に大食の産物として擧げて居るのと、固  
 より出入はあるが、相似て居る。特に層檀の密沙  
 華三酒は嶺外代答麻離拔條、諸蕃志大食條の眉思  
 打華酒と同様のものなるらしい。Hirth 氏等は之

を眉(波斯語 Mei 酒の義) 思打(波斯亞拉伯語  
 Sherbet, Sharab 酒の義) 華の三酒とし、密沙華も亦  
 た密・沙・華の三酒として居て、その解釋は牽強に  
 過ぎるやうだが、この兩者を同様と視たのは至當  
 のことと思ふ。そして代答に「以蜜和香樂、作  
 眉思打華酒、暖補有益」といへるを視ると、こ  
 の酒は普通にいふ酒ではなく、暖補有益は補血  
 の効あるをいふのであらう。Pale 地方に葡萄及び  
 無花果から製する所謂 Honey などの類を謂ふの  
 であらうと想ふ。又たこの國の境域から視れば、  
 宋史及び清波別志に「秋冬暖」とあるにもさまでの  
 不思議はないやうである。

### 三

Omān の首城 Sohar の波斯名を Mezoen といふ  
 由は Magoudi の傳ふるところだ、これが宋代の勿  
 巡なるべきはさきに已に之を説いた。こゝに予輩



は賈耽の傳ふる(新唐書地理志に見ゆる)綠海西岸の航程に一つの關鍵を得たやうな心地がする。今その本文を擧ぐると

自<sub>三</sub>婆羅門國南境<sub>一</sub>、從<sub>三</sub>沒來國<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>烏刺國<sub>一</sub>、皆緣<sub>三</sub>海東岸<sub>一</sub>行、其西岸之西、皆大食國、其西最南、謂<sub>三</sub>之三蘭國<sub>一</sub>、自<sub>三</sub>三蘭國<sub>一</sub>、正北二十日行、經<sub>三</sub>小國十餘<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>設國<sub>一</sub>、又十日行、經<sub>三</sub>小國六七<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>薩伊瞿和竭國<sub>一</sub>、當海西岸、又西北七日行、經<sub>三</sub>小國六七<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>沒巽國<sub>一</sub>、又西北十日行、經<sub>三</sub>小國十餘<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>拔離訶磨難國<sub>一</sub>、又一日行至<sub>三</sub>烏刺國<sub>一</sub>、與<sub>三</sub>東岸路<sub>一</sub>合

することは出來ぬが、二三知り得るところのものを述べて、他は今後の研究に待たうとするのである。

さて予輩は右の文中に見ゆる沒巽を Mezoen の音譯で、宋時の勿巡即ち Sofar であらうと想ふのである。かく視ると所謂設國も三蘭國も解釋が出来るやうである。こゝに注意すべきは「自<sub>三</sub>婆羅門國南境<sub>一</sub>、從<sub>三</sub>沒來國<sub>一</sub>、至<sub>三</sub>烏刺國<sub>一</sub>、皆緣<sub>三</sub>海東岸<sub>一</sub>行」といへる一節である。賈耽の所謂海(印度洋)の東岸とは印度の南端よりその西北岸に沿ひ、Kerman, Fars の沿岸を經て、波斯灣頭 Euphrates の河口に至るまでを謂ふのである。沒來は Philips 氏のいつたやうに Malé 即ち Malabar であり(G. C. B. R. A. S. XX, 222) 烏刺は桑原博士の「たやうに Ubulā (Obolla) であらう。」(史林第一卷第三號波斯灣の東洋貿易港、博士は賈耽が Euphr-

ates (Firat) を弗利刺と譯してあるのを疑ひ、その利か刺の一字は衍字と認めねばならぬといつて居るゝが、かゝる稱呼もあるやうである。時は後るゝが、西紀一五八一年に Bagdad に遊んだ John Newberia は、この河を Furo ゝつて居るゝが Strange, Eastern Caliphate, 28. に見えて居る。されば「其西岸之西皆大食國、其西最南」の三蘭國も波羅門國即ち印度の南境附近に求むべきである。従つて予輩は之を Sarendib 即ち錫蘭 Ceylon であつて、三蘭は Saren(dib) の對音であると信ずるのである。固よりこの島は師子國として賈耽の文中に見えて居る。さすがに賈耽も北四日にして没來 Malé に至る Sarendib の師子國たるは知つて居たが、海(印度洋)の西岸の南端なる Sarendib の師子國たるは知らなかつたと見ね、そこで之を別國と想ひ三蘭國と譯したものと見ゆる

實際武備志の卷末に載せてある鄭和の航海圖を見るとき、當時忽魯謨斯 Hormuz に行くにも、賈耽の所謂緣海東岸行と共に錫蘭から Maladiva, Lakka diva を經、所謂須多大嶼番名速古答刺 Socotora を過ぐる所謂西岸を航行したことが知れる。従つて予輩は「自三蘭國正北二十日行、經小國十餘、至設國」の設國を亞刺比亞南岸の古代所謂 es-Schehr (ech-chihir, Sour) であると信ずるのである。設 (Shet, Sher) 國は極適切の音譯である。ここに當時 Merbat と稱する海港があつたが、後には Dufar (Djafar, Zhafar) が盛になつた。これが星槎勝覽の佐法兒であるが「自古里國 (Calicut) 順風二十晝夜可至」といつて居る。瀛涯勝覽には祖法兒に作つて、古里から十晝夜にして至るべしといつて居るが二十晝夜の誤であらう、といふのは阿丹 Aden に至るに約一ヶ月といつて居るからで

ある。又だ Ibn Batuta は Zharar から印度に行くには順風で充分一個月を要するが自分は二十八日で Kalkicoth (Calicut) に着いたことがあるといつて居る。(Trad. par Défémercy, et Sanguinetti, II, 196)。此等は皆な古里からの日数ではあるが、錫蘭からとしても大なる差はなからうと思はれるのである。

設國から「又十日行、經小國六七、至薩伊瞿和竭國、當海西岸」といつて居る。こゝに方位は示してないが、特に「當海西岸」といつて居るのを見ると、亞刺比半島東南端のある地方を指したものと見ゆる。和竭の二字は Kalkat Kalkatu, (Calatu) に類似して居るが薩伊瞿は何の音に對したのか不明である。又だ Marco Polo の紀行に依るに、Dufar から Calatu までは海路六百英里たるといふ。Ibn Batouta に依つて Zharar から Oman (Kalkat) の在

るところ)までの間は陸行二十日とある(II, 196)日数が稍々多いやうだが、大した不都合もないやうである。

次に薩伊瞿和竭から「又西六七日行、經小國六七、至沒巽國」とあるが、沒巽を Sohar として Kalkat からこゝに至る距離を Edrisi の地理書には、海岸に沿うて二百英里として居る。(Trad. par Jaubert, I, 151) 二百英里を六七日行としては、此も日数が多きに過ぎるやうだが、先づ大體に於て不都合はないやうである。

次に沒巽から「又西北十日行、經小國十餘、至拔離譚摩難國、又一日行、至烏刺國、與東岸路合」とある。沒巽即ち Sohar から、波斯灣頭に至るまでの間に於て西岸に於て有名なるは Bahrain である。そしてこの地に Al-Kaif といふ有名なる海港がある。大食諸國の地名には al なる亞刺伯語

の冠詞を必ず冠するものと、冠せざるものと、時に冠し時に冠せざるものとの三様がある。Al-Katifは必ず冠するものゝ一である。これが宋時に俞盧和地と譯せられた地名であらうと想ふ。この國名は宋史文昌雜錄に見ゆるのみでなく、宋會要にも「熙寧六年十二月十六日、大食俞盧和地國、遣使蒲囉訛來貢亂香等」、詔依廣州價回賜錢二千九百貫別賜銀二千兩」ともある。Al-Katif港は唐代から有名であつたやうだが、賈耽の拔離訶磨難國はたゞ名が似ないのみか、所在も異なるやうである。これは一日にして烏刺にゆける處でなくてはならぬ。賈耽は東岸の行程を説いて「又自提颯國西二十日行、經小國二十餘、至提羅盧和國、一曰羅和異國、國人於海中立華表、夜則置炬其上、使舶人夜行不迷、又西一日行、至烏刺國」といつて居る。されば拔離訶磨難國は「海

中立華表」の提羅盧和國と烏刺を距ること畧ぼ同距離の處になくはならぬ。提羅盧和國の所在は前から畧ぼ判つて居たが之をMagouitiの Djerrarahの音譯と視たの桑原博士の發見であつて、(史林第一卷三九五頁)固より動かすべからざるものであらう。予輩はこの拔離訶磨難國を Abbādān ではないかと想つて居る。訶磨難と Abbādān とは音に多少の類似がある。拔離訶磨難は Bahr-Abbādān の對音かも知れぬ。又た Abbādān の名は Abbādなる人名から起つたのであるから Aboul-Abbādān などいつたのではなからうか。固より典據のことであるからなほ研究を要するはいふを須たぬ。

#### 四

宋史にはさきに畧ぼ解釋を試みた層檀・勿巡・俞盧和地の外に、なほ大食を冠する國に陀婆離と麻囉跋がある。この陀婆離は宋史大食傳に

(咸平)三年、舶主陀婆離、遣使穆吉鼻來貢、吉鼻還、賜陀婆離詔書并器服鞍馬。

とあり、又た宋史馬亮傳に

海舶久不至、使招來之、明年至者、倍其初、珍貨大集、朝廷遣中使、賜宴勞之、是歲東封、亮敦諭大食陀婆離蒲含沙、貢方物泰山山下、

といふのである。これは亮が廣州に知となつて居たときで、是歲とは大中祥符元年を謂ひ、宋史大食條に「大中祥符元年十月車駕東封、舶主陀婆離上言、願執方物赴泰山從之」とあるのがそれである。諸蕃志大食條にも見えて居る。又た宋會要には

眞宗天禧三年五月、遣使蒲麻勿陀婆離副使

蒲加心等來貢

とある。列傳に陀婆離とあるのは蒲麻勿陀婆離で

蒲含沙は蒲加心 (Abou-Kasim) であらう。蒲麻勿は Abou Mohammed の對で陀婆離は大食人の風習としてその名の末に加へる生地の名であらう。

天禧三年は西紀一〇一九年である。なほ會要には神宗熙寧六年六月五日、大食陀婆離慈進奉都蕃首保順郎將蒲陀婆離慈表、表男麻勿將貢物、乞賜將軍之名、仍請以麻勿自代、詔蒲麻勿與郎將、餘不行

といふのである。これは宋史大食傳にも「熙寧六年都蕃首保順郎將蒲陀婆離慈表、令男麻勿奉貢物、乞以自代、而求爲將軍、詔但授麻勿將」と見えて居るが、この麻勿は前の蒲麻勿陀婆離らしい。(會要の將貢物の將は奉の誤であらう)それは兎も角陀婆離は正しくは陀婆離慈であるといふことがこの文に依りて知らるやうである。

大食國でこの名に似た城市は Adharbayjan 地方の

Tabrizである。固よりこれは海港ではないがこの地方では有名な城市で所謂 *Al-Hajr* (波紋ある) 絹織物・天鵝織・及び毛織物で有名であり、蒙古伊兒汗朝の時にはこの地方で最大の城市であつたといふ (Strange, *Eastern Caliphate*, 163-4. Meynard, *Dictionnaire*, 132-4)。<sup>○</sup> かく層檀といひ陁婆離慈といふ *Adharbāyjan* 地方の大食人が陸路に依らずして海路を採つた所以のものは宋の勢力が支那の西北方にすら及ばなかつたからで、こは會要に

仁宗天聖元年十一月、入内内侍省副都知周文質言、沙州大食國進奉至闕、緣大食國北來、(北乃比之謔)皆汎海由廣州入朝、今取沙州入京、經歷夏州境內、方至渭州、伏

慮自今大食止於此路出入、望申舊制、不得於西蕃出入、從之、乾興初、趙德明請道其國、不許、至是恐爲西人鈔略、

故從海道至京師

といつて居るのでも判る譯である。この消息は宋史大食傳にも傳へて居る。又た時は後であるが、*Ibn Batuta* の紀行にも *Zaitun* 即ち泉州の主要なる商の一として *Tabriz* の *Sharifuddin* (*Cheref eddin*) を擧げ、口を極めて稱賛して居る (Yule, *Catley*, 487. *Ibn Batoutah*, trad. par *Delfeméy et Sungenetti* IV, 270) その泉州に居るから視るとこれも海路から來た巨商で所謂船主であらう。又た陁婆離慈の蒲姓は上に見ゆるが如く、久しく廣東に駐り、代々都番主であつたやうで、これが程史に見ゆる蒲姓の白猿かとも思はれ、従つて泉州蒲壽庚等の祖先かも知れぬ。

麻囉拔については、宋史大食傳にはその名のみが見ゆるのと、宋會要には

哲宗元祐四年四月九日、詔大食麻囉拔國貢使

加立、特授保順郎將一

といへるのが見ゆるのみだが、嶺外代答には詳しい記載があつてその末に「哲宗元祐三年十月大食麻囉拔、遣使入貢、即此麻離拔也」といつて居る。さればこの國貢使加立は元祐三年(西紀一〇八八)に入貢して次年に保順郎將を授けられたものと見ゆる。この國の所在については、嶺外代答に廣州自中冬以後發船、乘北風行、約四十日、到地名藍里、博買蘇木白錫長白藤、住至次冬、再乘東北風六十日、順風方到此國、

とある。藍里即ち藍無里 Zambri は Sumatra の西北の地名であれば、Hirth 氏等が此國を Hadramant の Merbat 港に擬したのは、單にこの記載のみから視れば當つて居るやうでもあるが、(Chan Jarkua, 120) 代答になほ此國を以て「爲大食諸國之都會、」

といひ「此國產乳香・龍涎・眞珠・琉璃・犀角・象牙・珊瑚・木香・沒藥・血竭・阿魏・蘇合油・沒石子・薇蓄水等貨、皆大食諸國至此博易、」といひ、「巨舶富商皆聚焉」といひ、又たこの國から麻嘉 Mecca に至るに「西去陸行八十餘程などいへるに頗る疑がないでもない。これはなほ他日の研究に残すこととして、こゝになほ書き加へて置きたいことは嶺外代答に見ゆる眉路骨惇といふ國である。これは代答に麻離拔、麻嘉 Mecca 白達 Bagdad 吉慈尼 Gaznah 勿斯離 Masuni と共に大食國の一として傳へてある國である。

有眉路骨惇國、居七重之城、自上古用黑光大石疊就、每城相去千步、有蕃塔三百餘、內一塔高八十丈、內有三百六十房、人皆纏頭搭項、寒即以色毛段爲衣、以肉麵爲食、以金銀爲錢、所謂絞綃・蓋薇

水・梔子花・摩沙石・礪砂、皆其所産也

とあるがその本文である。この國の擬定を試みたのは、予輩の知る限では Hieha 氏等を始とする、(Chau Ju-kua, 141-2) 氏等は眉路骨惇を亞刺伯語外道の義なる Mulhidan の對音と認め、Rome の首都なる Constantinople を謂ふのであつて、「居三七重之城」云々は曖昧ながら羅馬及びその七丘を指したものと見へるといつて居る。眉路骨惇は氏等のいへるやうに Mulhidan の對音であつて、是は易ふべからざるものであらう。しかし斷じて羅馬を指したのではなくて、その實 Bahr 郊外 Zaw Bahar (Nautchar 早春の義) に於ける拜火教徒 (Guebres) の拜火殿堂を謂つたのである。この堂殿については Yakūt, Kazvini の書に詳記してあるそうだが、予輩は今之を利用することの出来ないのを遺憾とするが、その大畧は Strange 氏の Eastern Caliphate,

カイに抄録して居る。それに依るとこの殿堂は Mecca の Kabah に對せんが爲め之を模したもので、その最大なるものは Mulhidan と稱する大圓蓋を冠し、高一百「エル」以上に及びこの中央殿堂を圍繞して三百六十房あり、この各房に司祝居住し、一年に一日交代して祀事に従ふといふ。是が代答に見ゆる「有蕃塔三百餘、内一塔高八十丈、内三百六十房」のそれである。「エル」は約我四尺九寸であるから、一百「エル」以上といふのと約八十丈に大差はない。特に三百六十房の恰も相合ふのは、動すべからざる證左だと思ふ。この殿堂に關する紀事は Meynard の Dictionnaire, 569-570 にも見えて居るが、この中央殿堂の周を百「クデー」、高を百「クデー」を越ゆといつて居る。「クデー」は約一尺五寸強に當る。高には傳へる人に因りて差はあるが、これは目測よりする自然の結



果であらう。なほこの圓蓋の上に一大絲旗あり、風之を吹けば、Tinned に達したといふ、固より信するに足らぬが、兎も角この蕃塔の高大なものと堅固なものは大食國內に話柄になつたもので、それが舶人に依りて支那まで傳へられたのであらう。なほこの殿堂内に充滿せる偶像と圓蓋上の大旗とで Rawlinson 氏は之をもと佛寺であつたらうと考へ、Naw Bahār は Naw Vihāra (新精舎) の訛であらうといつて居る。(J. R. G. S, 1872, p. 510) 又た代答には「居七重之城…毎城相去千步」といつて居るが、これは Balk 城に七門あるのを誤り傳へられたか、又た Naw Bahār の周圍七「リーグ」の地方がその社領となつて居たのを聞き誤つたのかは不明であるが、所謂眉路骨惇國の Balk たるは殆ど疑ひなからうと想ふ。

條に殆ど全く代答の眉路骨惇國條の文を採り 蘆眉國自麻羅拔西、陸行三百餘程始到、亦名眉路骨國、  
といへることである。蘆眉は殆ど Rūm の對音であらう、そして同書の斯加里野 Scilly 條に「近蘆眉國界」といつて居れば殆ど羅馬本國のやうにも聞へる。これは明に趙汝括が羅馬城の大且堅にしてその法王の殿堂の侈麗なるを傳聞し、之を代答の眉路骨惇と思ひ錯つたのである。従つて産物にも多少の斟酌を施してある。Hirth 氏等がこの明白なる誤謬に心附かなかつたのは眉路骨惇の考定に於て Naw Bahār を思淨ぶることが出来なかつたからであらうと想ふ。

### 五

なほこゝに序を以て書き加へたいことは颯といふ字に關してである。唐代西域に颯颯といふ國があ

る。Marquart 氏は之を *Zawul* (*Za-wul*) の對音と視た。近時桑原博士は謝颺が *Zabul* の對音たり得るとの假定のもとに賈耽の四達記に見ゆる提颺を *Daybul* の音譯と視て「大唐西域記の謝颺が *Zabul* の音を表はし得る様に提颺は *Daybul* の音を表はし得る筈である」といつて居る。(史林第一卷三九四)尤もこれは Pelliot 氏の「英譯諸蕃志を讀む」に依つたのだと見ゆる。提颺を *Daybul* に當てるのは *Yule* 氏以來の舊説で、予輩もしか信ずるのであるが、問題は颺がなせ *bul* の音を表はし得るかに在る。といふのは颺には日の音符がついて居る。若くはその類似の音しかないのである。故に予輩は慧超傳箋釋に於て、慧超が謝颺を社護羅 *Sedjestan* (*Zawul*) とするにも拘らず、なほ謝颺を *Sedjestan* の音譯と視たのである。ところが近時此字について一寸氣付いたことがある。即ち均しく

唐書の西域傳に俱位といふ國があつて、その都城を阿賒颺師多と傳へて居るが、この阿賒颺師多の颺を一つの宋本には正しく颺に作つて居るが他の宋本には颺に譌して居る。こゝで予輩は謝颺の颺も提颺の颺も共に其の音符を有する颺の誤で、もとは均しく謝颺提颺であつたであらうと想ふのである。謝颺ならば *Zabul* を表はし、提颺ならば *Daybul* を表はし得るは言を須たぬ。(七月十三日)